
絶望薬

古尾 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶望薬

【Nコード】

N4281I

【作者名】

古尾 光

【あらすじ】

ある薬売りが作った絶望薬。病院に呼ばれた薬売りは、ある患者に絶望薬を処方する。

ある薬売りが、変な薬を開発した。絶望薬と安直な名前だ。名前の通り、この薬は飲むと絶望してしまう薬なのだ。こんな薬どんなときの使うのかと思われるかもしれないが、意外と使い道は多い。

ある日、薬売りは病院に呼ばれた。

「今日はどんな御用でしょうか？」

目の前にはこの病院の医者が居る。薬売りはこういう風に呼ばれて仕事をするのを主としていた。

「少し厄介な患者が居てね。末期ガンなんだが、なかなかそれを認めようとしない」

いつもの仕事だ。絶望薬を与えれば、生きる希望が無くなり、自分が死ぬ病気だということ認めてくれるのだ。今の世の中、患者の承諾なしに医療行為はできない、その隙間の商売だ。もちろん、そんな薬を勝手に処方したら問題になる。しかし、薬売りは病院の人間ではないし、この薬は痕跡が残りにくいので、問題になったことは無い。

「誰ですか、あなたは」

指定された部屋に行くと、12〜3の少女が居た。特に珍しいことではない、今まで老若男女、あらゆる人間にこの薬を処方してきた、今回の成功するだろう。

「薬を打ちにきたんだ。注射だけど大丈夫かい？」

この時、病院の名前などをだしてはいけない。あくまで無関係な人間なのだ。

「注射ぐらい大丈夫です」

きつめの口調だ。初対面で警戒しているのもあるが、もともと気が強いのだろう。

少女の腕に注射器を刺し、薬を注入する。これで2〜3日もすれば成果は出るだろう。

少女の病室を後にして、医者のところに戻る。

「処方してきましたよ。お金のほうは大丈夫ですか」

医者から、分厚い茶封筒を渡される。かなりの報酬だが、きわどいことをしているのだから当然ともいえる。

「そういえば、今回の依頼主は誰なんですか？」

いつもは気にならないのだが、なんとなく興味がわき質問をしてみる。

「本来秘密なのだが、君なら大丈夫だろう。あの子の両親だよ」

なんでも、自分の子供が日に日に、痩せ劣り苦しむにながら、なお生きようとするのが耐えられなくなったそうだ。なんともありふれた理由だ。

病院を後にする時、あの少女が居た病室を見上げる。仕事の後、よく希望薬を作りたくなる。その効果も、調合法も知っている。しかし、このゆがんだ世の中は、希望薬を求めていないようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4281i/>

絶望薬

2011年10月9日21時49分発行